

圧力にアレーナはすんなりと薄い尻を突きあげるような格好になった。

ぴと……。

アレーナの陰部に処刑の肉槍、赤黒くなった若者のペニスの先端が触れる。肉鉗の竿の部分握る獄吏の少女が、うつとりとした様子で狙いを定める。

くちゅ、くちゅ……。

アレーナの割れ目の上、薄い桃色をした肉の扉、すでに半開きになった局部の上でペニスの先端が躍り、しつとりとした粘膜の擦れる音が響く。

「あ、うう、あうう……」

快感にアレーナの尻の産毛が逆立つ。ぴりぴりとはじける小さな青い火花。アレーナの魂は興奮と快感に燃えあがろうとしている。

と。蜜が絡まる粘膜の擦れが不意にとまった。肉孔。アレーナの子宮に通じる肉孔を牡の先端がついにとらえたのだ。文字通りの急所。アレーナ最大の弱点。あとは弩のトリガーを引くだけ。

裸の獄吏たちは倒れたメルヴァを見、同じように倒れたソーシャを見、さらにはヴァレリエを——否、ヴァレリエの股間に食いこむ飾りを見やった。

「かまわぬ。やるがよい」

竜の目が赤く光り、獄卒たちは酔い痴れたように笑い、頬を染めて凶行を完遂する。

「蜜を……蜜……」

「犯せ……犯せ……」

「快感を……」

口々に若者は呟く。ただ呟くだけではない。若者は下から腰を突きあげ、同時に、アレーナの左右を固める二人の青年がアレーナの身体を後ずさりさせるように圧力をかける。さらには、処刑台となる若者のペニス握る少女が、巧みに欲望を導く。綺麗なピンク色に染まる小さな肉薔薇<sup>にくばらばら</sup>。その中心に牡の衝角が力強く押しつけられる。

「うおッ！」

アレーナは初めて味わう膺への圧迫に、顔を歪めて絶叫する。鼻の上にしわを寄せ、白い頬を朱に染め、獣のように犬歯を剥きだしにする。

——こッ……股間に……股間に、股間に……。

股の間。斜め上に押しつけるような圧力が強まっていく。ただの圧迫感はやがて押しつぶし、貫くような残酷なものとなった。

「あ、あ、あ、あ、あ！」

アレーナは短い叫びを小刻みにあげる。かっと見開かれた両目の眦<sup>まなざり</sup>からは涙が溢れ

でる。

「股間に、股間に、股間に、こッ、こッ、股間にいいッ！」

乙女の叫びにすでに意味はない。そして、その瞬間がついに訪れる。

いやらしい蕾。その中心に、熱い怒りが吸いこまれていく。上下左右を固められたうえでの圧力。ペニスが入りこんでいける場所は一つしかなかった。

ぐ、ぐぐぐーっ……。

焼けた火箸のようになった若いペニス。その先端がアレーナの扉を強引にこじ開ける。

「あ、あ、あ……あああーっ！ あはあああっ！」

二の腕と肩を押さえつけられ、アレーナがのけぞる。毒液によって、すでに少女の膣は緩みきっており、そのために散らされる痛みを感じることはない。ぬるりとした動きで肉鉗が少女の髀奥に吸いこまれていく。抵抗のようなものはまったくなかった。ずぼっ！

一瞬。文字通り一瞬の出来事であった。下から突きあげる若いペニスが、アレーナの股間に根元まで突き刺さる。

「う、うああ、あッ……あはああっ！ ああーッ！」



薄く小さな扉が無理やりにひろげられ、アレーナはそこで絶叫した。

たつぷりと汁を噴く肉貝は大きくこじ開けられ、襷の奥にまで硬いおしやぶりが埋めこまれる。串刺しの刑は完成したのだ。

「あ、あ、あうう……」

アレーナは悔しそうに顔を歪ませる。乱れに乱れた銀色の髪が、少女の額ひたいに二、三本ばかり張りついている。

「う、うふうう……うふううん……」

初めての感覚に少女は苦悩している。ただ熱い、焼けるような感覚。アレーナの膺に根元まで突き刺さった牡の衝角。その上を真っ白い本気汁と鮮血が入り交じったカクテルが、つーつと垂れ流れていく。

——こ、これは、こ、これは……。

アレーナは、なにかをつかみかけている。出血の量もわずか。毒液によってほぐれた少女の股間は、痛みではないなにか、苦しみとは違うなにかを早くも獲得しようとしていた。

かくかくかく……。

そこに、若者が下から突きあげるように腰を動かしはじめる。最初はゆっくりと、

様子をうかがうように。若者の腰の動きはそのまま、アレーナとつながる肉の槍先に伝えられる。槍はアレーナの膣内をなめらかに走り――。

「あ、あ、あ、あッ！ あーッ！」

突然動きだした処刑台に、アレーナは歯を削いて吠える。柔らかい急所をゆつくりとであるが擦られる刺激。粘膜の奥で赤い火花が飛び散る感覚に少女は鳴咽する。

――苦しい！ いや苦しくない！ ああ、つらい……つらくない……なんなの、なんなの、こ、この感覚、この感覚……。

肉炉に直接火箸を突っこまれて風を送られる感覚。

だが、アレーナの肉体は本人が思うほどのダメージを感じていない。もともとその部位は挿入され、こすられるために存在するもの。必要なのは経験と慣れ。そして、少女の股間は経験も慣れもなかったが、薬によって十分に熱く緩んでいたのだ。

かくかく……。

下からの突きあげ。アレーナの下になる若者は、腰を小刻みに振ってさざ波をアレーナの股間に送りつづける。ストロークの小さいピストン運動。若い衝角がアレーナの膣内に震動を与える。

「う、うふ……ん、ん、んふッ！」